

校友會誌

第三拾八號

昭和四年三月

滋賀縣立彥根中學校

校 友 會 誌

第 三 拾 八 號

校友會誌(第三十八號)目次

口語繪
校歌
祝辭

五年 曾我繁三謹記一

◆論說

隨筆

五年 佐野直 二

校庭公孫樹に關する口碑の錯誤

五年 岩崎直 四

何をか文明と言ふ

五年 吉川長造 八

人生につきて

四年 中野重信 一〇

青年と理想

四年 丸橋秀夫 一一

◆文苑

五年 種村儀平 一八

命に代へる寶なし

三年 福田泉正 一六

自 己

五年 曾我繁三 一九

去り逝く心

五年 大森久壽 二一

人生行進曲

五年 大森久壽 二二

日本より南米へ

五年 大森久壽 二三

緑ヶ丘に

五年 大森久壽 二四

暑中休暇に友よりの雁書

U君の死

蝗

野末の薄暮

弱者と強者

晩秋の夕暮

父の死

鹽田

商賈

春の秋

由の歎樂場

夢を求むる者

秋

四季の風景

最後の言葉

或る夜

留守

支那手品

母の歸りを待つ

あぶ

長命寺の祭

米谷君の思ひ出

秋の夕暮

夕立

入學

四年

曾我繁三

川澄健一

組田重嘉

同 一

末松寛修

平野芳夫

角田道夫

上林博

岡庭清

北村輝

三年 粕谷定輝

二年 松宮實

二年 清水正義

同 田中宗男

一年 田中宗男

四年 四田亮三

四年 高橋金次郎

四年 柴田禮二

四年 松井敬三

四年 新谷又平

四年 郡田浩次

四年 柴田正己

四年 佐藤正

二四

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

田舎の夜明

横山正一 四七

蛇の破滅

山口彌平 四九

初夏自適

大和田清朗 五八

詠史

同 大和田清朗 五九

時の流れ

五年 種村儀平 六〇

夢の精

五年 大森久壽 六二

雀の米

五年 久米孝男 六三

悠紀の夜

四年 曾我繁三 六三

試験前夜

四年 川澄健一 六四

春の印象

四年 吉原定藏 六五

三つの時

四年 組田重嘉 六五

罪の人行く

四年 同 六六

敗將北へ歸る

四年 同 六六

太 陽

二年 松宮實 六八

小さいもの

二年 同 六八

飛んだ帽子

二年 清水正義 六八

汽車ごっこ

二年 同 六九

夕暮

一年 竹内 一

追憶

五年 山口彌平 七一

秋の愁傷

四年 組田重嘉 七二

四季の織山

四年 同 七二

旅に

二年 吉田穰 七三

木枯に

二年 日夏慈樹 七四

秋八題

二年 清水正義 七六

雜吟

四年 平野寛 七七

雜美

四年 吉田穰 七七

秋の詠

二年 組田重嘉 七七

俳句三題

二年 川澄健一 七七

夏休み(川柳)

五年 久米孝男 七八

悠紀齋田拜觀の記

四年 川澄健一 七八

第四學年修學旅行記

四年 家森武夫 七九

茶木伊三郎

若原文五平 八一

茶木伊三郎

茶木伊三郎 八二

第三學年修學旅行記
 養老への旅
 伊吹登山
 白鷺城に登りて
 夏の旅

◆各部々報

武道部
 短艇部
 野球部

◆雑録

學校日誌
 昭和三年度校友會各部役員
 會計報告
 編輯後記

三年	四年	五年	組田重嘉	八四
柴田進	平野寛	和田孝夫	川澄健一	八六
			水波平淳	八八
			種村儀平	九〇
			和野孝夫	九二
			平野寛	九三
			柴田進	九四

九六
 一〇六
 一一三

一三一
 一三四
 一三六
 一三八



即位禮當日紫宸殿ノ儀ニ於テ賜ハリタル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸シ萬世不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ朕カ躬ニ逮ヘリ朕祖宗ノ威靈ニ頼リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク神器ヲ奉シ茲ニ即位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ誥ク

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率井テ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ皇考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢弘シ以テ皇風ヲ宇内ニ宣フ朕寡薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼戴トニ頼リ以テ天職ヲ治メ墜スコト無ク愆ツコト無カラムコトヲ庶幾フ

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ彌成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ

御大典を祝し奉る

曾 我 繁 三 謹記

時は將にこれ芳菊薫る霜月、吾叡聖仁慈にわたらせらるゝ陛下には山紫水明にして瑞雲たなびく平安の京に幸し給ひ、皇祖天照大神の御靈なる賢所を移御あらせられ、親しく即位の禮及大嘗の祭を行はせ給ふ。

幸なる哉、琵琶の水清き湖畔に位する吾近江野は平安の京に程近く尙畏くも今春龜卜の御定めにて悠紀齋田拜命の榮譽を受け、爾來縣民一致以て神穀供納の大任を終へ奉りし事や。此の聖代に生を享けしもの、たれかは陛下御一代唯一度の大典を奉祝し、愈々向上進展勉學精勵、以て第二國民として聖旨にたがはざるの覺悟なかるべき。

茲に謹みて、聖壽の萬歳無疆を祈り、吾六百の學徒と共に、衷心の至情、滿腔の至誠を捧げて此の目出度き曠古の大禮を祝し奉る。



論 說

隨 筆

佐 野 忠

自分の隨筆と言ふのは決して長い人生の「嵐と突進」の後の高朗たる境地から生まれる靜寂な散文詩ではない。又鋭敏な眼に映る身邊雜事の解剖や批評や玩味ではない。ただ單に隨筆である。

1 迷 妄

「文學とは何ぞや」とるすといが、晩年に到つて迷つた所のものに自分は餘り若くして迷つてゐる。自分にとつては永久のそして不可解の命題であらう。實際は迷ふ必要ないらしい。「何であるか」と言ふ前に「是れだ」と示すべきが本當ではあるまいか。——自分は文學科學者でないから。又迷ふにしても「是れではどうか」と位に積極的に分量して行く形でなければいけな

2 觀

概念や觀念からは文學は生まれない。必要なのは藝術的人格の高揚である。理窟ではない。姿だ。多面的な人生の抽出である。

3 文 字

暗記すべきものでない。使ふべきものだ。故に便不便と言ふことに制約されるだらう。だが古典趣味と保守趣味が是を制約

することがある。

4 價 値

眞善美。物の見方によるのだ。故に物と言ふ物は常に三つの價值を持つてゐる。人間が平均を失はせることは出来ない。

5 文學的ネツプマン

大衆文藝と稱するものの謂ひである。文學の第一義的なものを捨て小乗的話の筋の奇怪な構成、外面的粉飾、異常な詭計によつて讀者を操る所は心理をよみ得てゐる。

6 5 た

ほの／＼と浮み出でたる朱き塔鐘に明け行く三井寺の朝

大いなる富士は靜けく雲の上にはほのかざろひて靜寂をまもる

右を見つつ左を見つつ入りかぬる小門の鈴の音忍びがち

雑木林時雨るる音に驚ける小鳥の行方空暗きかな

和やめる湖の蘆間の水鳥の影動かさず漂へるみゆ

かう書いて來ると熱々自分は狭い範圍に於いてのみ考へてゐないことが分る。

結局人間と言ふものは自分以外の何物でもあり得ないらしい。今更に中世の哲人クロオデイ・フェランの名言を想ふ。又墨

客李影明の言もつまりシノニムだと想ふ。

7 てえたてえと

誰もそのエツキスパートたり得ない。何故と言ふと人間は常に赤裸々ではあり得まいから。又それ程徹底出来るものではない。つまり人間は弱いのだ。時々理性の剖刀を砥いだりして。

8 挽 歌

うなだれて柩を送る足下にやをら崩るゝ浪の音かな
磯を嘯む浪のとどろと鳴るなべに有りしその日を想ひ出るかな

9 めるへんらんど

黄い世界だ。赤の様に熱すぎもしない。青の様に又。

紫の典雅灰色の頽廢に墮さない。動でもない將又靜でもない所。強ひて求めたならば煩惱の彼方だ。その國人は。

歌はないかも知れないが、吟む冥想の臉をたれて、山に杜にそして蒼穹に見入り勝である。時々話す、夢見勝に、成人と子供を夢の國に誘ふ話を、だが青年だけは聞きたがらない。

からたちの實を喜び乍ら彼等は満足するだらう。小春和に。

10 ひこね

ゆきととびすばらしい詩の世界だ。ゆきととびと湖と城！ふゆのひこねはう。

校庭公孫樹に關する口碑の錯誤

岩 崎 直 砥

本校運動場の北端中央部に聳え立つて居るあの公孫樹は、單なる一個の風致木ではない。又冷しい綠蔭を作つて、炎熱に汗したる者を慰はしむる爲めに、保存されてゐるのでもない。實は貴重なる天然記念物であつて、徒らに一中學に於て私すべきものに非ず、それは國家的にも保護されて然るべきものである。と云ふのは、往年本校に職をとられし篤學の士平瀬作五郎氏が、あの一本の樹に依つて、遂に「イテフの精虫發見」てふ世界的一大發見をされたからである。聞くならく先生は、在職中常にあの公孫樹の梢高く登つて、眞摯なる研究を續けられたさうである。さればこの一個の公孫樹は將に天下に誇るべき

至寶であつて、濫りにこれを伐採し、或は枯死せしむるが如き事のあつてならぬは勿論、進んで周到なる保護をこれに加へて永久に保存を計つて行かねばならぬものである。嘗て兩三年前の事、運動場の整理と老樹の保護と云ふ名自に於て、思ひ切つた枝打を行へる際、期せずして卒業生側や町の人々から手痛き攻撃を受けたる一事は、全くこの意味からなのである。

以上は、不計も自分が本校に赴任して今日迄に、あの公孫樹に關し、聞き及んだ事柄であつた。實際、イテフの精虫發見者がこの學校の舊職員であつた事、又その發見を導いたものがあの一本の樹であつたと云ふ奇しき因縁を聞かされた時は、云ひ難い感慨を禁じ得なかつたのである。さうして其後は偶像崇拜的の氣分をさへ持つてあの公孫樹を眺めて來たのであつた。次で自から腦底に浮び來る事は、我々はあの公孫樹に對し進んで積極的保護の途を講ずるのが至當ではないか。又どうしても運動場の妨害となるのならば、適當の場所を選びこれが移植の計を樹てるのが至當の策ではないかと云ふ事であつた。然し更らに考を進めて見ると、これが爲めにはこの公孫樹が貴重なる天然記念物なる所以、即ち換言すれば「イテフの精虫發見」てふ一事が何故恩賜の賞を賜はるまでに學術上價值あるものであつたのか、否世界の學界を等しく驚異せしめた程の大發見であつたのか、或は右發見者平瀬氏と校庭の該樹との間に如何なる緣故が介在して居つたのであるか、と云ふやうな事實の明瞭なる智識を我々が「彦中」の者の間に徹底させる事が先づ必要事であらう、更に一步を進めては、これを普く天下に改めて公示し記念すべきこの公孫樹の存在を知らしむる事も。

斯かる考へから自分は先づ原稿募集中の校友會雜誌にでも、この公孫樹に關する一文を寄せて見ようかと思ひ立ち、夏休みの暇を幸ひ、少しくイテフの精虫發見の學術上の價值や、平瀬氏のこれが發見の道程等に就て調査を開始して見たのであつた。所がその結果は意外にも、調査を進めて行くに従ひ、上記本校々庭の公孫樹に關する口碑に、大なる錯誤の存するものなる事を知つたのである。口碑傳説を以つて作られし歴史の遽に信すべからざるを聞いては居たが、不計も今回のこの一事を以つて、思ひ半に過ぐる感を得たのであつた。兎に角調査の結果に於て、問題の記念すべき貴き公孫樹が、その實一顧だに値せざる一本の凡樹に化し去つたのである。調査の動機とその結果は、斯くも甚しき皮肉を以つて結び付けられねばならぬ事になつ

たのである。然し斯かる事實の一旦判明したる以上、これをそのままに隠匿して、誤れる口碑を意味なく傳統せしむるの愚も考へて見なければならぬ。これ、一文を草してこゝに掲げんとする所以である。

世に「火の無い所に煙は立たぬ」の譬のあるが如く、從來の口碑にも全く事實無根荒唐無稽なりと一概に云ひ難い節があるのである。即ち往年平瀬作五郎なる人物が職をとられし事は、文書に依つて見るも確實な事である。又同氏がイテフの精虫発見者たる平瀬氏と全く同一人なる事も、保存されたる自筆の履歴書中の記載に依つて明である。従つてその同氏が在職中校庭の公孫樹に登つて何事かを研究せられたる事、並にその時の公孫樹が恐らく今日問題となれるそれである事も事實として想像されるのである。

然るに又一方、自分の行へる調査の結果に基くならば、以上の如く有力なる参考事項の存するに拘はらず、尙從來の口碑を否定するに足る反證が多々存するのである。先づ第一、本邦植物學界の權威牧野富太郎氏の「自然科學」第一卷第二號に登載せられたる論文「日本植物學發達史」の中に次ぎの文を見る事が出来る。「……………そのイテフの精虫発見者は平瀬作五郎氏である。同氏は植物の畫を描く爲めに其の時分助手として東京の大學の植物學教室に勤めて居つて、その時之を研究したのである。然しこの研究には終始どれ程池野成一郎氏からの助力を得たか解らない……………」と。この文中池野氏とあるは、現帝大名譽教授理博池野氏の謂で、同氏は親しく數年間に亘り平瀬氏を指導してイテフの精虫発見を完成せしめ、又自らも引き續き、ソテツの精虫発見に成功されし植物界の大御所である。今又同氏が「自然科學」第三卷第一號に寄せられた一文「イテフとソテツの精虫」の巻頭を見るに「イテフとソテツの精虫が見出されたのは明治二十九年のこと、今から三昔以上の古いことである。隨つて此等精虫の記事は極く初歩のもの外、多くの植物學教科書にも出て居るし、殊にイテフの精虫発見者平瀬作五郎氏は數年前老齡を以つて死去し既に歴史的過去の人となつた……………」と書かれて居る。この兩氏の記述を自分は疑ふ事は出来ない。然も平瀬氏が本校に残されし自筆の履歴書の内容が前二氏の記述と一致符合するに於ては、益々口碑の信すべからざるを知るのである。即ち平瀬氏の発見前後に於ける動靜を同氏の履歴書に依つて調査したる結果は次ぎの如くである。同氏は安政

年間に生れ、明治八年初めて職を岐阜中學校に奉じ爾來明治二十一年迄岐阜縣下の諸學校に圖畫教師として轉歴せられて居たが、其後二十一年の八月より二十九年の九月迄の間を帝大理學部の助手として東京に在任されて居たのである。それから同年の九月十日附を以つて彦根中學に來任され三十七年の三月まで在職せられたのである。尙右履歴書の末尾には、明治二十八年「公孫樹の受精並に胚發の研究」「公孫樹の花粉管の行爲」の二論文提出の旨が附記されて居る。この二論文こそはイテフの精虫発見の論文であつて、これが池野氏の許に提出せられ然して學界にいよ／＼公表されたのが前記池野氏の文中にある「二十九年」なりと解釋されるのである。以上牧野、池野兩氏の言と平瀬氏自筆の履歴書の内容とを對照綜合して案ずれば、平瀬氏のイテフの精虫発見は既に本校赴任前の事に屬し、決して本校に在職中彼の公孫樹に依つてなされたものではない。又平瀬氏は元來福井縣の産であつて、その履歴書に示された所に依るも、精虫発見以前、即ち本校赴任以前に於て、彦根の土地に又彦根中學に、況んやその校庭の公孫樹に關係のあつた人物とは、到底信する事が出来ないのである。

斯くの如く確實なる反證を擧げて論及し來るならば、折角の公孫樹も、精虫の発見には何等あづかる所なき一本の凡樹たるに過ぎざるものとなる。況んや該樹が、銀杏を生ずる雌樹たるを聞くに於てをやである。

然らば斯くの如く明白なる事實の存するに係はらず、何が故に從來の如き口碑を傳ふるに到つたのであらうか。思ふにそれは、精虫発見の仕事が完成したるを機會に東大を辭し、再び昔の圖畫教師として彦中に赴任せる平瀬氏が、校庭に格好の公孫樹のあるを幸ひ、更らに其後の研究を進むる意味に於て、屢々梢高き所へ登られたであらう一事と、今一つ、これより遙に後年に到り學士院に恩賞の制度設定せられ、その實施の第二次即ち明治四十五年に於て、池野氏のソテツの精虫発見と共に、平瀬氏のイテフの精虫発見が恩賜の賞を以つて報ひられたる事實とを結びつけたるに發したのではなからうか。即ち今更既に數年前彦中を去られたる舊師の面影を追想し、それではあの當時頻りに公孫樹に登つて何事かを研究されてゐた様であつたがあれが精虫発見の大事業であつたのかと、こゝに誤認をしたのが抑も事の初となつたものと想像せらるゝのである。豈計らんや、精虫の発見は既に本校赴任前の遠き昔、東京に於て發表されてゐたのである。

表校庭公孫樹に關する口碑の錯誤に就て、自分の言はんとする要點は、以上を以つて盡きてゐるのであるが、たゞ終りに、若し自分の以上の断定が正しいものであり従來の口碑が事實に反するものであるならば、他に學校創立記念樹等の事情の存せざる限り、向後首肯するに足る事由の爲めに、斷然これを伐採處分し去るも、其處に敢て大なる支障の存せざるものであらう事を、一言附加して置き度いのである。

口碑尙果して眞か。これを信ぜざる論が實か。更らに有力なる資料を掲げて、以つて吾人の爲め真相を教示するに吝ならざる人士の出現を待つ。

(夏休みの最後の日に)

禮 節

吉 川 長 造

大自然は吾等に斯の人類といふ生命を與へたりき。我等は自然より生命なるものを贈られたるなり。故に我等人類たる生命を受納し、合せて、斯く「人類」と叫ぶ。而して、今日に迄斯く稱へ來れるなり。かゝる故に、我等の人類として此れに義務あり、權利あり。若し、人にして義務の遂行なく、權利の實行なき者、此れを以て非人となすは非か。非たれば即ち、人類の何ぞ、獸に選ばん。

視よ。熱視せよ。現代に於ける大多數の人の權利の主張に忠實であり、義務の遂行に怠慢なる寧ろ不實行なる、此れ何たる矛盾ぞや。恰も奮闘を厭ひ、逸樂を望む者に類し、これ人類に對する冒瀆者なり。華美を求め勞を惜しむは人情なり。必ずしも唾棄すべきものにあらず。然れ共、此所一步の進退は乃ち青史を盛飾するに足るものなり。即ち、古來國家の興亡、民族の隆沈、一として之に依らざるなく、國家の盛衰はその國民の如何に依るべく、國民の人格の高低は國家の興亡を支配す。華美の追及は人格品位を示す。美を求め鬪ふは、人格の向上ならざるか。狩野探幽先生の畫紙に於ける一抹面作師夜叉玉の一の清

き響き、すべて鬪ひつゝ求めんとて動き居るなり。その動く所、行く所、人格は表現さる。何とならば即ち、彼等はその心血を自己の生命を、作品の内に注ぎ込まんすとす。即ち「作品の好拙は自己の人格の高低なり」と。故に彼等藝術家の一抹一筆に全精神の働き、全肉體の働きを集注し、完成の曉を夢みつゝ不斷の努力を重ねるは唯向上の一途を思ふに外ならず。これぞ藝術家に與へられたる義務に過ぎず、吾人も同様自己修養の義務を有するなり。大自然の吾人に與へし使命なり。毫も忽にすべからざる嚴重なる命令なり、法則なり。吾人は此れに従はざるべからず。此れを行なはざるべからざるなり。行ふ所に自己の鍛練あり、反省に依りて不斷の監視を行ひ、嚴格なる檢討に依り人格の向上は進行するなり。無缺なる人格を誰か初めより持ち合はすべき。人格完成ぞ人類の最高目的なる。

今、人格を無視したる時、人生に於ける目的の在り得べき理あらず。人間自らの價値をも見出だす能はざるなり。人格價値の意識を持つ者のみに於て、自己向上の希望を許され、祈念する者のみの知る苦痛の内に人格は生ずるなり。向上を希圖し祈念し能はざる者、則ち、人格價値の意識無き者、換言せば即ち道德に順じ、之に従ふ能はざる者、此等は人格無き者と云ふべし。敬すべきを敬し、卑しむべきを卑しむ、清きを取り、邪を捨つ、これ正道なり。然れ共、此の道を行ふ能はざる者あり。非人格者と云ふべし。然るに何ぞ世に非人格者の多き、恨むべし。

余嘗つて幼時、縣社八幡神社に秋季祭典腥々丸組御幣奉迎使として參拜せし事ありき。他に參社するもの十一組。朝早くして陽未だ山の端を漸くはなれしのみ。清く且つ水うたれたる參道に陽さし來り、秋爽かなるを感じしむる朝、金冠直衣の古典的服裝を爲し行きたり。後、御幣奉持し歸る。中途、幾多の人々に出逢ひたり。此等人中御幣に禮を守りし者、果たして幾人なりしか。郷より町に野菜を持ち來りし紺木綿の野良服着けたる人々の肩より荷下し、握る財布を片附け禮を守り、低頭するを見たる時、誰か自己の不行躓を恥ぢざらん。鳥居の許に脱帽し、神前にぬかづく人々のその冷々たる行動は何ぞ。何の故ありて御幣の前に禮を保たざるや。

吾又、幸なる哉、福なる哉、京洛の地に曠古一遇の大典を擧げさせ給ふ秋、彦根驛頭に今上陛下の御眞影を御迎へするを得

たり。並び建つ家々の、國旗を掲揚し、人々路に立ちて我等の護衛軍を見る。彦根全町各戸に國旗の掲揚されし以上、彦根町全民はその掲揚の故を知らざるべからず。否、知るが故に掲揚せるなり。然るに御眞影の前に来るも知らず、禮を守らざるもの多々あるは即ち、その人格の低級なるを示すものに非らざるか。自らの品位を卑しむるに非らざるか。敬すべきを敬し、卑しむべきを卑しむの道に順ふ者の少なきは恨むべし。

禮を持し、節を正しうす、これ人格の向上にあらざるか。明治先帝の教育に關する勅語の内に教へて曰はく「恭儉已レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メ」と。各個の性を重んじ、以つて自らを養育せよと畏くもおぼせらるゝに非ずや。然らば、その道は。先づ以つて、身禮節を基礎とせざる可からず。斯くある故に我等人類の守るべきものは禮節なり。

吾等人類の義務の遂行は禮を守り、節を確く持するに有りと云ひ得べし。

(終)

何をか文明と言ふ

和田孝夫

近頃、文化といふ文字が頻りに用ひらるゝが、この文字を正當に理解する人が、果してどの位あるであらうか、文化とは文明開化の略であつて、文明開化は英語のシヴィライゼーションの譯語たることは申すまでもないが、さりとて、東洋に此の思想が無かつたのではない、文質彬彬とか、郁々乎として文なるかなと言ふが如きは同一の思想である。然しながら文化と言ひ、文明といふ文字は時、處、位によりて其意義の變化する伸縮性ある文字で、之を捕捉することは容易でない。カアライルの如きは「文明人は石城を建て、樹木を植ゑ、結婚を生涯の約束として尊重し、貨幣にて評價し得ざる古器珍異を藏し、圖書館、法典を有し數千年に遡る過去を有し數千年にわたる未來を望む」と言つて居るが、此の程度の標準ならば南洋ジャヴァの如きも已

に文明の程度に達したと言つて差支へない。カルチスの如きは「文明の測度は婦人を尊敬する深淺如何にあり」と言つて居る。前年ある論客が頻りに文化といふことを唱道するので、その意義を反問する者があつたら、其の學者は答へて「學問ある美しき妻と、書齋にて語り、苺にクリームをかけて共に之を食するが如きを言ふ」と言つたのは有名な話であるが、近頃ペンキ塗りアメリカ風の田舎屋を稱して文化住宅と呼ぶと共に餘りにも卑猥なる見解である。

然るに此等に比して稍々進みたるが如く見ゆる文化論は、個人の發達に重きを置いて、一切社會制度も國政も此の上に根據を立てたるものでなければならぬと言ひ、其の基調を理性に置いて居る一派である。確かに是は進歩した見解に相違ない。殊に社會が凡てあり、國家が萬能であり、一個人の存在が認められざりし東洋に於て、人民の個性を重んじ、個性を完全に發達せしめんとして理性に基調を置かんとするは文明の一面であることは否定出來ぬが、併し乍ら文明の全面ではない。文明とは個人が集つて社會を組織する後に生ずる所の生活状態であつて、個人の個性を保護し、發揮すると共に社會の社會性を保護し、發揮することが眞の文明であり、文明の全面である。而して、社會の社會性は人と人との相抱合、協和、同情することによりて保護せられ發揮せらるるものであるが故に、其の基調は理性の上に置かるべきものではなくして、盛情の上に置かるべきものである。斯くて個人の個性と、社會の社會性と共に發達し、理性と感情と共に發達し、此に一種の力を生じ、此力がラジエーション的に、放光的に、働らいて立派な文明を作るのである。今や、個性と理性とを主にする議論は己に足れりと言ふべしである。宜しく社會性と感情とを主とする議論の盛んなるべき時である。

人生につきて

中野重信

人、生るれば必ず死す。生れて死するもの豈獨人のみならんや。生きとし生けるもの又すべて死す。然らば則ち何を以てか

人と禽獸とをわかたんや。

曰く、人の人たる所以は永遠に生くるにあり、と。

生けるものはひとしく子孫の繁榮を圖らんが爲に生存す。然れども人は斯くの如き單純なる目的のみを有するものにはあらず。人は常に自己及びその子孫をしてよりよくあらしめんが爲に常に進歩向上を計りて一步も止むることなし。しかして常に或る希望、或る信念を抱き、眞理を探求し、ある理想に向つて精進しつゝあり。しかれども理想は更に理想を生じ、人々は漠然として遠きユートピアに到達せんとして永遠に理想を追求し努力す。かくして國家、又は社會の爲につくしたる人々、或は又藝術、科學、哲學等の研究をなして文明に貢獻したる人々、それ等の人々はすべて、その國家、その民族、その子孫のあらん限り、よしんば肉體は亡びてその形を失ふとも、形なき靈魂、即ちその名、その眞理、その藝術は悠久に存在し、永遠に朽ち果つる事なし。

これぞ人の人たる所以にして又萬物の靈長として尊ばるゝ所以のものなり。かの「人生は短し、藝術は長し」といへる、或は又「功名を竹帛に垂る」といへるが如きは、豈この事をいへるものにあらずや。

これを思へば彼の醉生夢死、以て何等爲すところ無きが如き人は正に禽獸にも等しきものといふべきか。

人、一度、之を考ふる時、誰かよく發憤せずして可ならんや。

あゝ、人生は短し、理想は永遠なり。

群生の中に最も得難き、貴き、人として、生を此の世に享けたる我等須からく、大いに發憤し、努力し、以てその人生をして最も有意義なるものたらしめずんばあらず。

人 生 觀

丸 橋 秀 夫

人生遂に如何？ 高山樗牛先生でなくとも、我等青年の頭を悩ます一大問題だと思ふ。これを考へぬ中は、ほんとに平和である。一旦これに目覺めたる者は、死を賭しても解決しなければならぬ。人生を考へざる者は心内平和である。併しこれを解決せぬ上は、決して眞の平和を得られるものではない。故に「人生遂に如何」なる問題を解決せねばならぬ。

人として生を望まぬものはない。併し死にたいと願つてゐる人があるかもしれない。が、それは自己を生かさんとして、行詰つたものの悲哀なる叫びではあるまいか。之を解決しようといふ念願が燃えてゐて、これをなし得ぬ者の悲嘆ではあるまいか。私は生きたい。出来ることなら、永遠に生きたい。かう云へば、それは煩惱だと云はれるかも知れない。併しその人がほんとに生命を欲しないのであらうか。生きたいと欲するのが煩惱ならば、死にたいと云ふのも人間の煩惱ではあるまいか。然らば、死と生とを超越した時、煩惱をなくしたと云ひ得る。

故にこの生死を超越するのが、人を眞に解したのであるまいかと思はれる。然らば吾等は生死を超越したらよいではないか。出来るなら、悩みはない。出来ぬのが人間の悩みである。その悩みを除くのが吾等の問題である。それで吾等現代人の特質から考へて見る。

吾々現代人は個性尊重をはげしく主張する。個性尊重とは如何なる意味かは知らぬが、今の者は個性を尊重することが恰も我儘を増長することだと考へてゐはしないか。これが私の大に疑問とする所である。私が考へるには、個性の尊長とは各個人の人格を尊重することだと信ずる。天賦の特性を認めることだと信ずる。苟しくも個性尊重を叫ぶものは人格を向上するに努力してゐなければ嘘だと思ふ。いくら個性尊重を叫んだとて、自己の人格が卑劣であれば、人はその人格を認めない。認める

を得ぬ。個性尊重を叫ぶ現代人は須らく人格向上を計れ。人格を向上せんとすれば、必ず現實より善き理想といふものが生じて来る。その大理想と現實との間大間隔のあるを見出すであらう。故に大理想に到達せんとする欲求が大なれば大なるほど強ければ強いほど、現實が醜く見え、現實を否定せねばならぬやうになる。かうなれば人間は自然厭世觀を抱くやうになる。これは吾等當然の運命である。當然の歸結である。然るに眞の自己尊重は人格を向上し、永遠の生命を得るにある。ところが人格尊重の概念が破綻した。然し永遠の生命を求めねばならぬ。命にかけて血みどろになつても、永遠の生命を求めねばならぬ。一生懸命になつて、一切を放擲せねばならぬ。永遠の否定は永遠の否定でなくして、永遠の肯定に至る門であると分る。自己を捨てることは自己をほんとに活すことだ。

さうすれば現代人の求愛が熱烈なればなるほど、社會の悲劇が生ずるのだと云ふことが分る。人が生きるには自己の私慾を殺さねばならぬ。人に愛を求めるときではないのだ。人を愛するのだ。人を愛して止まぬのだ。

かうなつてくると、世の中に争ひといふものはあるべきものではない。争ひは不自然な我執の暴露だ。如何なる争ひの後も哀愁が伴ふ。これは争が本性でないからだ。本性は愛だ。愛すればじつとしては居られぬ。愛は動くのだ。愛するもののためには汗を流すのだ。我欲にとらはれぬ愛だ。神に通ずる愛だ。神は愛なりと思ふ。愛することが神の御旨にそふことだ。自己を虚うして、國家社會に盡せばよいのだ。自己を空しくすれば、恰も器内を眞空にすれば、空氣が自然に流れ込む如く、天籟の妙音が我が心に感ぜられる。そこで大悟徹底することが出来るのだ。只自己を虚しくすればよいのだ。

人生は眞に自己を否定し、神に接するに至る求道の旅である。

青年の理想

一 圓 宣 雄

我等は青年である。潑刺たる意氣と、燃える様な進取的氣象とを胸に藏してすく／＼と伸び立つて行く青年である。我等の前途は實に洋々として限りなく奇怪なる大軀を眼前に横へて來らん日の我等の雄飛を待ち望んで居る。

我等は此の茫漠限りなき前途に、如何にして踏込んで行くか、如何にして此の奇怪なる前途に處するか。我等は此の前途に對して確固なる信念を懷き、高遠なる一目標を定めて、之によりて未來に於ける行動を律しなればならぬ。此れ即ち理想を生ずる所以で、理想は即ち未來に於ける行動の基本を爲すのである。人は總て其前途には大なり小なり理想を翳して、其れに向つて邁進して居る。殊に我等は青年の若き元氣に任せて其の理想も實に高遠で且つ偉大なるものである。而して猛烈に其の理想に近づかんと努力する幾多の希望は、次から次へと征服さして行くが、希望の芽は絶間なく萌出でて熄まない。一日一日と努力すればする程我等の理想に近づいて行く。然し理想は常に遙の彼方に輝いて到底到達する事を許さないのだ。我等は此の理想の城壁を乗り越えて完全に理想界の人となり終す事は出来ないのだ。理想は原則として到底到達する事の出来ないもののだらう。併し理想が青年の向上發展を促す事は、否めない事實だ。高遠にして偉大、且つ健全なる理想を有する青年の數の多い程國家は益々隆昌を極めて行く。確かに國家は強くなる。例へば獨逸の如きは先づ第一に指折られるものだらう。我等の理想は須らく高遠にして偉大、且健全なものでなければならぬ。

青年期は肉体的にも精神的にも一生涯の一大變革の行はれる時である。従つて其の間には微妙なる心の動きも起り、潑刺たる意氣も心頭に湧き出づる時であるから餘りに遠大に過ぎる様な理想を懷くのも仕方がない。併し或る方面から考へて見ると反つてそれがいいのだ。如何に遠大に過ぎると云つても唯努力し勤勉する事に依つて、如何程でも其れに近づくと事は出来るの

だ。其の理想に向つて勇往邁進すれば必ず我等は満足した結果を得られるのだ。貧弱な理想に向つても毫も積極手段を試みず、懐手して僥倖を待つ徒輩に較ぶれば雲泥の差である。斯る徒は潑刺たるべき意氣も徒らに沈滞し、遂に人生の劣敗者となる事を免れない。

我等は此の理想を青年にのみ與へられた天寶と信じて、之に向つて勇往邁進して止まず、品性向上の資としたいものだ。それには努力唯々撓まず倦まざる努力を必要とする。

我等は信する、努力の敵はない、努力は總てを解決すると。

命に代へる寶なし

福 田 杲 正

現在我々の命程尊きものはない。ではその命の寶の尊ひ事を示して見よう。此所に一人の貧乏者有り。彼は寢ても覺めても、唯金が欲しいとどかり思つてゐた。其處へ或る金満家が來て「貴様に五萬圓をやらう。然し貴様の命は貰はう」と言つた。彼は何と返答するであらうか。欲しい欲しいと思ひなやんで居る處へ、大變な五萬圓等と言ふ見た事の無い大金を貰ふのだ。寶に飛び上るばかりに喜んだであらう。併し代りに命をと思へばコイツはつまらぬ。どのやうな大金であらうとも、肝心要の命がなくては、折角の寶も役にはたたぬからそれは御免蒙ると言ふであらう。古語にも世間珍寶命寶第一とあり、世の寶はどれ程立派で尊くとも、我命に上越するものは何一つとしてない。全く命は尊い。三千世界の中一人として金と命とを交換する人はなからう。若し有つたらばそれは狂者に違ひない。しかるに往々世の中に、無二の命寶をおろそかにしてつまらぬことに二つとかけがへのない命をすてるものがある。何と悲しむべきことではなからうか。

自 己

目 加 田 榮 藏

此頃の私といふものを回顧してみた。

私は此頃一体何をしてゐるのだらう。別に悲しい生活もしてゐない。だが又楽しい生活もしてゐない。私の生活には何の意義も興味も又進歩もない。盲目的な、唯毎日起きたり寝たりするだけだ。唯生きてゐると云ふだけだ。何處となしにもつたらない、何かつまらない、空虚な生活に思へる。

一体私には意氣即ち青年の元氣があるであらうか？ 努力奮闘があるであらうか？

靜に古の聖賢英雄の青年時代を考へて見るのに、その多くは否全べての人が、すばらしい意氣を持つてゐたものだ。鐵石をも焼き盡くす元氣を持つてゐたのだ。この世界に自己と云ふものゝ存在が無くてはならないものだ。と云ふ大自信を有してゐたのだ。俺は俺だ。俺が世に無くては誰も無しと云ふ大信念を持つてゐたのだ。

あの大聖クリストが「我は神の子なり」と云つたのもその大信念を以てして初めて言へたものである。

私は自己の價値を知らなかつた。自己の希望を無視してゐた。今時我國にこの私様な青年が多いと云ふことを聞いた。軟弱なる歌を歌ひ、つまらない文學に耽る青年が。

嗚呼 鐵は實に熱い中に鍊へねばならない。青年須らく意氣に感ずべしだ。

嗚呼 今や昭和三年も暮れんとしてゐる。今年は曠古の御大典もあつて我が帝國は正に元氣満々たるものである。大和男子の血を受けた我々が眞に奮起せねばならぬ時である。君臣一体、美はしい日本國を益々美はしく擁護すべき我々は、この意氣に感じ元氣なく眞の日本男子とならねばならぬ。

嗚呼 我は若き大日本帝國の有爲なる青年であるのである。



文苑

去り逝く心

種村儀平

嗚呼！櫻咲く幼き春の輝かしさよ。

月日は流れて、園生の樹々は幾度か芽ぐみ、又幾度か紅葉して、顧る五年の中學生活も漸く其の終りに近づかんとはする……。

我等の前途は遼遠にして春の海の如くであるとは、一般の人の言ふ所であるが、その半面には隠し切れない、去り逝く者の淋しさが漂つて居る。

去り逝く心。それは恰も、春の陽が麗かに照る日、そよ吹

く風に誘はれて、散り逝く櫻花の心持ちにも譬ふべきであらう。あの落花霏々として、天空に飄るやその終りは如何であらう。塵埃にまみれ、或は汀に漂ふ。それは丁度浮世の波にもまれ、或は理想を追求して彼岸に達せんとする者に譬へ得るだらう。

さうして、一度虚空に舞ひ上つた花は、梢に戻つて咲き揃ふ事は不可能であると同じく、吾等の再會は恐らく期し難くであらう。これを思へば、吾等は或種の寂寞に胸をうたれる願れば五年の昔、新らしい制服に身を固め、金釧を光らせて喜んで居た事が淡い夢の様に思ひ出される。櫻咲く木影に又は若葉薫る學びの窓に、先生の教を受けながら、幼い感激に胸を躍らせ、幾度か輝きの眼を見張つた事であらう。

人生行進曲

曾我繁三

朝日に輝く金龜城——巍然と聳ゆるその英姿を幾度かあかす眺めた事であらう。又時刻を報する鐘の徐ろに打出されるのを幾度か耳にした事であらう。その度毎に我々は、逝きし英傑の面影を偲ぶのであつた。

やがて一年は過ぎた。二年も、三年も。かうして五年も將に暮れ様として居る。

時は今、秋老いて、冬至らんとする頃である。美しく野山を飾つて居た木の葉も一齊に梢を辭して大地に舞ひ落ちる。

あの木枯に吹き寄せられ、土に頼いて泣いて居る落葉を見れば「あはれ落葉よ……」と呼びかけたくなる。去年まで無心に眺めて居た銀杏の葉にも言ひ知れぬ哀愁を覺える。

去り逝く者の心はあまりにも淋しい。

朝に又夕に、教へ導き下された先生。學びの途にいそしみつゝある彦中健兒諸子よ！すこやかにませ。

我播きし學び舎よ、いくとせか踏みしめた緑の芝生よ、健在なれ。

永却かはらない城山よ、揺ぐこと勿れ。而して我等が前途を何時までも眺めよ——。おゝさらば。

眞善美の人間を育てあげるには苦しむ事闘ふ事に依らねば培はれないものである。だが幸私達同志の諸君は恵まれて居る。それは闘ふべく苦しむべく運命付けられて居るからである。人生行進曲につれて勇躍すべく運命の神に支持せられて居る

時は淀を流れる水の如く永遠に去つて永久に歸らぬ。人生は得難くして尊いものである。人生行進曲は種々神の御手に依て永遠に奏せられて居る。進め行進曲につれて憧憬の世界に………。私の机上には今時計がセコンドを刻んで居る。そのインターヴァル毎に人生に與へられた奮闘の時が逸し去られるのである。徒らの間に紅顔の青春も蘆生の夢に干渉せんとして居る。おゝ我等は爲さねばならぬ。我等は爲す可く世界に生を享けて來たのである。甘き青春の夢を見るもいゝ。美しき夢に憧るもいゝ。その甘き美しき夢幻が我々の理想を形作つて呉れるのだらう。だが我々は其の夢の甘さに酔うてはならぬ。青春の甘き夢に幾多の人達が道を踏み誤つたのではなからうか？「豚の快より聖人の快」と言ふ事がある。

からである。さうした闘士として赤手空拳たゞ汝々として荒れ狂ふ世の俗塵にもまれ行く雄々しさ！ 目覚めよ！！ 世の人よ、田野に牛馬を追ふ若人の衣囊を探られよ、工場にハンマーを打ち振ふ若き労働者のポケットを見よ！ そこには汗と油の滲んだ努力の結晶を発見するであらう。

かうして我々の同志は邁進して居るのである。雄々しくも勇ましくも男の子の身分に向つて行進を續けて居るのである。私は時々涯もない荒野を想像する。そこには一人の旅人が饑と疲れとにあへぎ乍ら、遙か野の涯にポツツリ浮んで居る一つの灯に向つて歩を續けて居る。ともすれば極度の疲勞の爲に彼は倒れ様とするのである。彼には重大な使命が負はされて居た。

父母は待つて居るであらう。あの灯は父母が待つて温い夕餉の灯であらうか？ 彼は奮然と起き上つて歩を續けるのである。

かうした旅人の姿、これが人生なのだ、天命なのだ。この運命の神の思ひのまゝ一縷の望を負つて人生の行進曲に歩を合せ様とする。我等の行く手には多くの誘惑の海、山の手が待つて居る事だらう。虎は嘯き狼は咆哮する。荒野の夕べの恐

ろしさも味は、ねばなるまい。紅塵萬丈の砂漠も越えねばならぬ。それが人生なのだ。

然し野の果に瞬く灯の有る所に我々の理想境がある。ジツト耳をすますと、そこへ到達した我等の先輩が奏でる行進曲が微かに聞える。あゝ私等は勵まう！ さうすれば早く彼等のパラダイスへ辿り着けるのだ。

最後に青二才の徒言として

温室育ちの我々も五ヶ年の間それは不十分ではあらうが兎も角花開いて新しい世界へと憧がれて居る。こゝまで發育したのは誰の力、我々は餘りにも己を知らない。第三者としての立脚地を忘れて居る様だ。餘儀なく温室を出んとする者もあらう。それは己を知らざるの徒だ。私も亦その一人だ。兎も角實を結ばんとして居る。社會の風にあたらうとして居る。然し、然し吾々の根莖は餘りにも弱々しい。不安なものだ。これも人生なのだから致し方もない。未だ温室に親切な主人の世話を受けつゝある異木よ、のびて行く汝自身の姿をかへり見よ、偃塞する勿れ、やがて我々と歩を同じくし同じき行進曲を奏で出づる事であらう。學べ！ 勵め！！ 突進せよ!!!。

昭和三、八、十七

日本より南米へ

大森 久壽

私は地球縦貫トンネルについて或書物で、讀んだおぼえがあり、又先年小田先生が「君等は此所から南米へ行くには、どの様な方法を取れば最も早く行く事が出来ると思ふか」と問はれた時、我々の答は、飛行機に乗つて行くとか、又電波に乗れば最も速に到着出来ると云ふ様な答が多かつたと思つて居る。然し我々の答の中電波に乗る事が出来るか否か、否その様な事が、自分等現代の頭で想像する餘地ありや否や。實際電波に乗る様な事は空想すら尙遠く及ばない所であらう。然らば小田先生の説はどうであつたか、それは地球に直線状の且地球の中心を通する貫通トンネルを造つて、その中に落ち込むと、最も速く行けると云ふ説であつた。これは或程度に於て、我々の空想を許す可能性を持つて居ると思ふ。このトンネルの事については以前よりしばしば考へられて來た所の事ではあるが、これを作るには、莫大なる費用と種々の複雑なる研究とを必要とする故、空想中の空想に止められて居た。

今自分は、この興味ある事を考へて見たい。

先づ、これを開通せしむるには、どんな苦痛が伴ふか、費用の方は後廻しとして工事の状況を考察しよう。實際トンネルを造つて此の中に或る一種の客車を通して、人を運ばんとする以上はどうしても直径二十五米ぐらいのものは必要である。そしてその工事は深度を増すに従つて困難は増すに違いない。しかしながらそのトンネルが完成すれば、次に記る事がごとく種々の副産品が生じ、これによる利益によつて、建設費等は充分に償還し得る事は疑ふ餘地がない。その中第一に擧ぐべきものはその地熱の利用である。無盡蔵なる地熱を或る装置により地上に送り出し、これを電気エネルギーに變じ、各方面の工業に利用すれば、必ずや、莫大なる利益を得るのみならず、ひいては工業が盛大となつて、人類の文化に貢獻する所が大であらう。第二には、トンネルの掘鑿によつて得た土を以て海面を埋立てるのであつて、これを有功に使用すれば、大なる利益を得ると云ふ事は誰も考へ得る事である。又地球の中心は鐵によつて満たされて居る事は一般學者の信じて居る事である故、多くの掘出した土の中に多分の有用礦物を含有して居て、これによる利益も大なるものに違ひ

ない。以上色々考察すれば實現の可能性はあると思ふ。さて私はこのトンネルが、大阪、プエノスアイレス間に見事完成したとして、一度この客車に乗つてその間の旅行記を書いて見たい。

時は千九百七十九年七月二十三日私は、南米へ旅行の爲午前九時十分前に大阪のショットカーの乗場に來た。切符は百五拾圓であつて、日本郵船の南米航路の賃金の約三分の一だ全く安い。プラットホームに出ると、成程名の如く彈丸型で外部が厚い液体空氣の層で覆つて居る。これはこのショットカーが、地球の中心へ向つて落ちて行くに重力による加速度が増して、中心附近では、一秒間約六哩の速度、我特別急行列車の七百倍の速度で走るから、多量の摩擦熱を生じて、中心に達する迄にカーも人も、總て瓦斯化してしまふからである。私の乗つたショットカーは丁度九時に發車した。車掌さんが日本人と英國人と二人居る。時計が九時十分十五分と過ぎて、二十分になると車掌さんが「皆様回轉棒によりかゝつて下さい」と云はれた。次に又四十秒程過ぎて再び車掌さんは「そろ／＼回轉を始めて下さい」と云つたので、云はれる様に皆と共に回轉した。後から考へて見るに大阪を出た時は、

直立したまゝ下りて來たから、プエノスアイレスに着いた時は逆さになつて居るわけだから、彼地に着いた時、大切な頭をこわしてしまわない爲に回轉したのだとわかつた。中心を過ぎてからは中心からの距離に反比例して、ショットカーの速さは減つて行くわけだ。あれこれと考へて居る中に、地球の中心を過ぎてから二十一分、發車後四十二分の後の九時四十二分に私の乗つて居る客車は止つた。下車すれば驚くべし山川草木總て綠色なりし天地は、四十二分後にはアンデス嵐寒き、廣漠たる原野、氷雪とじこめたる漠々なる大平原が眼前に展開するとは!! 自分は、僅に四十二分間に八千哩に及ぶ長距離を走り得た事を思ひ、科學の偉大な力を想ひ呆然たらざるを得なかつた。そしてプエノスアイレスの一端に立びて、パンバスの大平原の眼前に横たはりし時、この縦貫トンネルこそは我が大和民族發展の鍵であると叫ばざるを得なかつた。

(終)

緑ヶ丘に

久米 孝 男

バサツ!!!。新聞のほり込まれた音と同時に飛び起きて、手早く滋賀版を擴げた。打つた! 打つた! 球は光を貫く。選手の手の間には堅き決意の色漂ふか……「う——ん勝中とどな」軽い不安が獨言となり、ためいきとなりそして遂に重い大きい心配となつて私を綠ヶ丘に行かした。二十八日!! 二十八日!!! 魔女の瞳の如く澄み渡れる天空には、一片の浮雲もなかつた。前々日來の碧空に引きかへ、東西にどす黒い入道雲奴がはびこつてゐる。ともすると沈みがちの心と、淡い汽車の旅の喜びとを胸にひめて、M驛に急いだ。驛にN驛から通學してゐるO君等がゐるので、ほつと安心した。「やあ」よう「どうやらうな」「う——ん」使らない返事はしたものゝその裏に接戦が豫想され、苦戦がアソシエーションされた走つた。汽車は走つた。走つた。そよ吹く風に青い青い波を作つてゐる中の一筋道を。山の麓を。I驛もK驛もO驛も。何時も感じのよくない隧道の中も。「四五回目だな」反対側に

わた私等二、三人のものは、あぶなげな足どりで、青い草の間々に見えるスコアボードを見つめた。Y驛に着いた。「少しだから歩かう」「うん」もう足はすばやく運ばれてかなりな上り道も、烈しく照りつける暑さも、時々吹き來る微風も更に意に介しない。大朝の大旗がファンの歡聲と拍手とそよ吹く風とに薰和してゐる。砂煙の所々に立つ、^{さか}かなり廣いグラウンドには、京洛の雄、京一中と京師との白熱戦。立錐の餘地なき迄も、埋め盡した觀衆はその一球一打に萬雷の如き拍手、萬雷の如きどよめきを作る。かくて戦は接戦又接戦熱と力との交響にファンは陶酔の極に達した。悠々と言ふよりも一歩一歩と大地を踏みしめて、おゝ我が校の選手は入場して來た。おゝ見よ!!! 選手の赤ら顔に浮べる堅き決意の色。微風選手の戎衣を拂ひ、母校の譽を双肩に、天を衝く意氣。我等は選手にベスト而してビクタリーを切望した。おゝ、選手諸君よ!! 世に、三度に一度と言ふけれども、今度で四度目だ。連戦連敗とは閉苦しい。雄々しく攻めて、雄々しく守つてくれ。京師と京一中との戦は終つた。京一中は涙に咽んだあゝおゝ。滋賀一中!! 京一中と運命を共にする勿れ。京一中の慘狀を見よ。敗者は常に此の如くならん」だ。ノックが

始まった。我々の胸は躍り血は湧いた。「ノックは膳中の方が上手だ」「なんだ、無禮な大声を上げて。」少なからず癪にさはつた。「もうピッチャーだ」私は後をふりむいた。一見勢動者風の赤褐色の顔した小さい男だつた。兩軍はベンチを放れて行つて禮をした。「互ひに見合してツ」。人々は苦笑して眺めた。この戦ひが本大會の見物と寄り集まつたファン。素晴らしい人氣の中でプレイボールは宣せられ、観衆は球場中あふれるばかりの鈔氣に浸つた。攻守共にたゞ懸命！この檜舞臺を目的に過去幾年間、鍛へに鍛へた腕の冴へと舐驗とによつて。彦中が先攻。一回零點。膳中三點。神ならぬ選手諸君の失敗。どうして責め怨む事が出来よう。二回一點。敵零。三回三點。形勢爲めに逆轉。我等の喜びこの大地を取りまく雲の如き、いづくとも知らぬ果てから湧き出づる觀があつた折悪しく否折善く我等の前に多くの膳中生があつた。さつきの小男はまだ「四疊打をかつ飛ばせ」。「ボールピッチャー」などと滑稽味を帯びた言葉や調子で觀衆を苦笑せしめてゐる。三回膳中一點で同點。四回彦中零。膳中四點。五回彦中一點。膳中二點。彦中零。膳中一點。かくて十一對五となつて七回の裏に入つた。「ワン、シングルで此の問題を解決せよ」「ハ

ツ……ハ」次に沈黙。やつとの事でコールドゲームだけはのがれた。冷汗三斗の思ひとは此の時の事だつた。戦ひはだれ氣味になつた。頭が痛くなつた。「それでも練習して来たか」「練習する迄にルールを覚えよ」。彦中は一點を入れたのみで九回に入り總攻撃!! 球審バンコーヒーの呼賣子の聲がはつきり遠くの方まで聞えた程静かだつた。總攻撃とは名ばかりおゝ恨は長し十一對六。熱砂を蹴り、熱風を衝き熱と力とをいやが上にも増し、伯仲戦なりとの豫想をも裏切り十一對六とは。あゝ頭が痛い。尻が痛い。足が痛い。胸が痛い。力ない足どりで球場を出た。學校長にも松尾少佐にも會つたが御二方とも底面白くない顔をしてをられた。(一九二八、八、一)

暑中休暇に友よりの雁書

曾我繁三

(Y君より)

君、其後思はぬ失禮をしてしまいました。君も相變らず御勉強の事と信じます。休暇も後わづかになつてしまひましたね、今更ながら何だか残り惜しい様な心持が致します。

昨日K市より歸彦いたしきました。二十幾日の講習も無駄な遊びに費して仕舞つた様な氣が致します。毎日暑い日中に登校して聴講したものゝ結局得る處少なくして終つて仕舞ました。中々計畫通りの勉強は六ヶ敷いものですね、君に取つてはそんな事は無いでせうが。

御願ひ致して置きましたN先生の宿題は如何です。私も一寸手をつけたものゝ矢張り元來好きでない數學はとてでも連続してやる勇氣も有りません。するいとは知りながらね。

平安の方にはN、K、O、N君が通つて居ました。

かう毎日雨に降られ通しではやり切れませぬね、一度夕方涼しくなつてから御伺致さうかと思つて居ります。いつも御家に居られますか。では御自愛專一に御祈り致します。

(W君より)

やあS兄!

僕は相變らずのらくらブラ／＼して居ります。赤蜻蛉が青空を縫つて居る様な生活です。赤蜻蛉ならそれでいゝかも知れません。又それが彼等のすべき事です。然し僕は兄と同じく中學五年生です。やがて兄と今度の三月には卒業する奴です。かうして居られるのかと思ひ／＼終ブラ／＼して来る

日去る日を空しく送迎してゐる許りです。此の外に僕の——今頃の僕の生活状態を表示する方法は零です。

三角や代數の課題はやつておしまいに成りましたか？僕は無論まだです、まだ／＼です。昨日O君の家へ寄せて戴いて聞いて見たんです。君O君はやつて置いたか、置かなかつたか、どつちだと思ひます？O君の様な人なら多分、否屹度やつて置くだらうと思ふでせう、勿論僕もさう豫想しました。所が／＼……案に相違してO君はまだなのです。教科書も披いても見ないと謂ふのです、儀はがつかりましたよ、屹度／＼やつて置くだらう、そして僕も少しはやつて置くんだから二人にも分らない所を云ひ合して完全に西先生の課題が出来上るだらう、——つた様に思ひ込んで居たものだから、——西先生の頭が光つた頭が目の前にちらついて参ります、そして課題の力の字もやつてゐない自分が可愛さうですが此れは皆僕が蒔いたのですから如何しても僕で刈りとらねばなりません、十日餘りの休暇に最善を盡します。

忘れてゐるも損です、君！蒔いた種は當然その人に刈られねばならぬのです、怠けて遅れた處を償ふのは自分自身に責任、義務があるのです。

床に仰向けに寝ころんで星を數へる事が出来る香氣な休暇が逃げ去りましたね、後十日で……。

最後に一言

僕に寄せられた友の玉札を其のまゝおかりした様なものである。友より寄せられた其れ程心丈夫なものはあるまい。休暇は短い午睡の一夢だといつても變らぬ至言である、これが人生なのだ、西先生の宿題が多かつた様だ、けれ共考へ様によつては少いものもあらう。兎に角似而非學生である勿れだ眞面目にコツ／＼と人格、智識を植ゑ付ける事だ、その時こそあらゆる神秘を看破する力の根ざした時なんだろう。

U君の死

久米 孝 男

山に松茸の清香あり、野に垂穂の實のる月、十六師團秋季旅團對抗演習●拂曉戦に参加すべく我々は、夜中の歩哨勤務行軍戦闘などで、疲れ果てながらも小さい峠道を走つた。物陰に止つた。走つた。止つた。次にどうすべきか一向音沙汰

らう。君はもう一度この小春日和の櫻の花のちら／＼と返り咲きする校庭に来て、親しい學びの友に會ひたかつたらうさうして無邪氣に楽しく幾日も遊びたかつたらう。

おゝ君よ、U君よ!! 私は君が試験前に一生懸命になつてゐるのを度々見た。教室に入る前まで本を見て居た。こんなありふれた事も私には思ひ出の種となる。さぞ卒業證書が見たかつたらうね、卒業して社會の人々と伍して行きたかつたらうね、君は親に先立たねばならない不孝を悲んだだらう或は病の苦しさに苦しんでいつたのか。それとも何事も考へず思はずただ一途に天國の神のみ側までの旅を喜んでであらうか。いやそんな筈はない。夭折せる彼に限つて人生の喜の一部を味はふことは出来なかつたらう。脚氣!!。脚氣!!!。あゝ恐ろしい。U君はどうしてこんな病氣にかゝつたのだらう。彼は脚氣鼻進と聞いて、果もない奈落の谷底につき落される思ひをしただらう。彼は泣き飽きる程泣き通しただらう。あゝ、死が此の世になかつたらば。あゝ悲しい事だ。君は永久にねむつた。おゝ十八春秋を此の世の名残りとして、君は永久に深い／＼眠りを始めたのだ。

君の机、さぞ主なきを恨んでゐるだらう。あの薄暗い片隅に

もない。で皆んな腰をおろしてしまつた。夜は明けたいしが黒雲がだん／＼大空にはびこつて、氣づかはない模様になつた。眠りに落た者、甘い話をしてゐる者、いたづらをしてゐる者、笑つてゐる者、種々雑多。「今日はけんが悪い」隣りにゐたM君急にこんな事言ひ出した。「なぜ」「U君の銃を持つて来たんで、傷した」「フツツ」空砲を撃つた後の掃除を嫌つたM君はU君の銃を持つて来た。そして銃の照星で傷したのだつた。話はそこで止んだ。朝霧が山を擁してゐた。日が昇るに従つて淡く薄く青黒い山々が前にあるのを知つた。U君!! U君よ! この人は近江線を通つてゐた。さうして我々の五星霜の學びの友の一人だつた。彼は十月の初めに黄泉の旅に出で立つた。彼はこの楽しい世界の人ではないのだ。彼は歸る所を知らない悲しい人になつたのだ。おゝ君よ、君は今何處に居るのか。君の靈は今どうしてゐるだらう。この銃に來てゐるのか、彼を殺したのは脚氣だ、脚氣の鼻進だ、心藏麻痺だ。おゝ脚氣よ、汝はどうして俺の友を奪つたのか。俺は汝を憎む。俺は汝を憎んでも憎んでも憎み足りない。あゝ悲し事だ、U君はどう思つて死んだだらう。彼は悲しみ切つただらう、屹度々々、君はもう五六十年は生きたかつた

白いほこりを一面にかぶつて、淋しく控へてゐることだらう果てもない瞑想、回想が次から次へと頭の中を取り亂した。敵味方の飛行機が入り亂れて頻りにばく音が聞える。

蝗

川澄 健一

何もせずぶら／＼して過した或る日曜日の夕暮、あまりのつれ／＼に田圃の方へ歩いて行つた。稲はもはやその黄色を増し切つて褐色とまでになつてゐる。秋の深いのもそれとなく知られた。眞赤な燃えつく様な夕陽が、西山に對して半圓をえがき、湖にただ今日の名残りを止めるかの様に、影を映して動揺してゐるのも面白い。微風がすうと面をかすめ、足軽く頻りに走つて行く。瞬間、目は今にも蟻などの餌食になりさうにやせて、觸れば直ぐ折れる様な弱い足で、老い惚れて茶色がかつた小さな體をこらへ切れないばかりに擡げて、光澤のない腫で、悲しさうに私を見上げてゐる蝗に惹かれた「あゝ可哀想だ……」。何か嘔きたさうに、口をもがもがするのはいぢらしい。彼女は稻のまだ瑞々してゐる頃に、小

さなはね廻る青虫として生れ出て、穂が深い黄色となる時には、楽しい住家、スウィートホームは破られてしまふのだ。そして此の世を去つてしまふのだ。

おゝ可憐な蝗よ。

お前も私も、大きな自然に較べて、何故こんなに短かい、はかない生涯なんだらうね。私より短かい、たつた三四ヶ月位のお前の生涯は、實際可哀想だよ。けれどお前の生涯は愉快だつたらう。大勢の友達と仲よく、自由自在に稲の上を飛び廻つて……。その様子を毎日のたのしみにして見ておました。たまに手に取るとにつこり笑つて又稲の中へ飛び込んでしまつた。……おぼえておなさる？あのだのしかつた時を……

まぶたが熱くなるのを感じた。蝗も泣いてゐる様だ。もうい秋の日は黄昏と化して行く。

ね、蝗よ。

泣かないでおくれ。此の世に生を受けたらきつと死なねばならない。だがお前とは、これつきり別れねばならないね。來年又お前によく似た蝗は多く産れるだらうが決してお前ではないのだよ。あゝ私は言葉が出なくなつてしまつた。

幾らか興奮してゐる我を、どうともする事が出来なかつた。夕焼はうすれて行く。赤は黄に、黄は紫に、紫はうす墨と次第々々に變つて行く。むらがらが西の方へ飛んで行く。夜の帷は頭の上まで下りて來た。さびしい晩鐘が六時を告げた。

野末の薄暮

組田 重嘉

秋の日も浅い頃のとある夕方、私は野原へ出た。鴉の飛んで行つた方に腫を移すと薄い墨で無造作に畫かれた日本畫の様に、神々しく嚴然と金龜のみ城がぼんやりとした中にもはつきりと浮んで居た。

野末を横切る山脈の全身を眺めると、今更乍ら山脈の褶曲の如何に偉大なるかを感じ、造化の神の打ち下した金斧の雄大にして又デリケートなのに驚かされる。無造作に打振つた斧ですらこの様な絶大な奇々怪々な味を持つ山々を作り給ふた神の御力の大きいにも驚かされる。科の急激な進歩を來した此の世に於てオーソリテイと呼ばれてゐる大學者すら、

弱者と強者

何氣なくからたちの垣の側を通りかゝつた私は、その青白い鋭い刺に突刺されてゐる蛙を見付けた。よく見れば脊中から腹へかけてズブリと突刺されてゐる。よ程日も経つたと見えて、蛙はもう枯葉の様な色をしてゐた。多分いたづら小僧がやつた事だらう。

かよはくしなびた双の手足を、引力の作用するまゝに打廣げて青白い腹を出して刺の針に突刺さつてゐる姿――

嗚呼！その斷念と覺悟とあきらめを表はしてゐる様な手！！
そして敗憐者の心持を表はした様に低く垂れた足！！

又大きくうつろに開いた誰かを嘲る様な口！！

青白い腹から刺の根本へ流れてゐる眞黒の血！！

彼等は何を語るのだらうか。私はそれを見た瞬間、強者の弱者に對する虐げの訴を聞いた。一冬の眠から醒めて春の短夜を鳴き明す彼の歡喜と幸福とに満ちた様な聲ではなく、臨終の乙女がやせ細つた手を合せて遺言する様な哀れな訴へだつた。それが悪戯小憎を呪ふ忌はしい訴と聞くには餘りにその死体は清らか過ぎた。彼は呪ふ事を止めて、哀願してゐるのだ。

神の御業の前には冠を捨て、ひれ伏すのも無理はない。科學を究むれば究むる程神の力の大きさはつきり認識し、人間と神との力の如何に遙かに懸絶せるかを知るといふ。この偉大な神の靈の力が山々の一本の木、一塊の土の上にも加つてゐるのを思へば、日頃見馴れた山脈のうねりにも神秘的な感情を表象するものがはつきりと存在してゐる。

若々しい稻の穂を縫つた微風が頬を撫でて行つた。香しい秋の風だ！炎天の下に農夫の丹誠によつて育まれた稻の穂は房々と風になびき、黄金の穂波は今秋のハーベストタイムの豊穰さを偲ばしめる。

名状し難いまでにあくまでも男性的に、又情味たつぷりに美しく、夏の名残りを惜しむかの様に、彼方の山の端に一團の雲が入日に反映して雄々しく輝いてゐる。

赤――黄――紫――薄紅……………

と順次に變化してゆく雲の色の移り變りをじつと見つめてゐた。

ラッシュアワーを過ぎた許りの電車が走り過ぎた。沿線の電柱の上の鳥はこの音に馴れてか動かうともしない。